

大阪サッカー協会

審判委員会ニュース

第 13 号 2013.09.23 発行

〒550-0004

大阪府大阪市西区靱本町 1 丁目 7 番 25 号

T K 靱本町ビル 6 F

(一社)大阪府サッカー協会 審判委員会

TEL 06-6441-5881 FAX 06-6441-5882

<http://www.osaka-fa.jp/>

(一社)大阪府サッカー協会 審判委員会

泉審判委員長挨拶

6 月より小川氏の後任の審判委員長を拝命しました。よろしくお願いします。

ワールドカップ 5 大会連続出場を決め、日本のサッカー界は大きく進歩を続けています。大阪のサッカー界も 3 年前に J-GREEN がオープンしてから多くの試合が組まれ、それに伴い、審判員は多忙を極めています。これからの審判委員会は、審判員と審判指導者の増員とレベルアップを図らなければなりません。そのための門戸は広くしていきたいと思っています。審判に興味関心のある方は積極的にアプローチしていただきたいと思っています。また、委員会としても発掘と育成に力を注いでいきますので、ご協力をお願いします。

大阪のサッカーがこれからも発展を続けていくように努力していきます。よろしくお願いします。

「UEFA CORE14 に参加して」 1 級審判員 田中 利幸 氏



2012 年 8 月・2013 年 3 月の 2 回にわたり、UEFA (Union des Associations Europeennes de Football : ヨーロッパサッカー連盟) が若手審判員の強化・育成を目的に開催している研修「CORE コース」に参加してきました。開催地は、UEFA 本部のある、スイスのニヨンです。

日本からはインストラクターの岡田正義さん、主審の木村博之さん副審の平間亮さんと田中の 4 人で参加しました。

私たちが参加した CORE14 にはヨーロッパから 6 か国 (アルメニア、エストニア、ポーランド、スペイン、アイルランド、イスラエル)、ヨーロッパ以外から日本とニュージーランドの計 8 か国が参加しました。

参加したレフェリーは各国主審 1 名・副審 2 名で、それぞれ国内の 1 部あるいは 2 部リーグを担当されています。

「CORE14」とあるように、今回は 14 回目のコースです。数年前から継続的に行われている研修であり、このコ

ースの修了者から多くの国際審判員を輩出しています。

CORE コースでは UEFA のインストラクターから直接、講義・試合分析・トレーニングなどの指導を受けることができ、今までとはまた異なる刺激を受けることができました。

8 月には Introductory course (10 日間)、3 月には Consolidation course (7 日間) が行われ、1 回目から 2 回目までのコースに約半年間の期間が開くため、3 月のコースでは 8 月から半年間の成長度合いも計られます。

Introductory course は基礎的な部分を学習する機会（講義が中心）、Consolidation course は応用編（映像を見てクリップディスカッション）という形です。

コース期間中には試合も割り当てられ、私たちは 8 月にフランス、3 月にスイスのアマチュアリーグを担当しました。

両リーグとも接触プレーが多く、選手のテンションも高い、非常に緊張感のある試合でした。

私たちが現地で担当したフランスのアマチュアリーグ試合では、判定やプレーに対する不満・フラストレーションが相手競技者に対する非常に危険なプレーで表現されてしまい、それが引き金となり両チームの選手による集団対立のシーンが起きました。

この試合の分析では、判定そのものより「なぜ危険なプレーや選手同士の対立関係が生まれてしまったのか」という点を丁寧に振り返りました。

原因として挙げられたのはホームチームの競技者が負傷退場したこと、集団対立が起こる前の時間帯から危険なプレーがいくつか続いたこと、上記のケースに対して判定のばらつきが起き、そのことで競技者とチーム役員の不満

がたまり、さらに対立の引き金となる重大な反則がホームチームのベンチ前で起きたことなどです。

もちろん日本でもこのような指導はされていますが、より深く、細かい部分を掘り下げて分析をしていると感じました。

今振り返ってみると、私は反対側の副審だったのですが、フィールド全体を視野に入れることができるため、反則された競技者、反則した競技者以外の競技者が 2 次的対立を引き起こす可能性がないか、またベンチや観客はどういった雰囲気かを感じることが更なる対立を未然に防ぐことにつながるのではないかと。また、2 次的対立を引き起こす競技者が反則が起きた場所とは全く関係のないところからやってくることに気づきや予測を持つことが重要だと感じました。

また、興味深かったことはプラクティカルトレーニングの様態を録画し、分析を行ったことです。

日本では各場面に分けてプラクティカルトレーニングを行います。UEFA コースではスイスのユースチームの選手を使って 7 対 7 のハーフコートゲームを行い、その中に判定・マネージメント・コントロール・再開など多くの事象が盛り込まれていました。

実際にフィールド上でトレーニングしている時間は 1 セット長くて 5 分ほどですが、その様態を映像で分析することは自分の課題を発見し、解決する手段を見つけるためには非常に効果的でした。

ここで紹介したのは、多くの指導を受けた中での一例ですが、参加した私たちがそれらをフィールド上で表現し、そして周囲のレフェリー仲間と学んできたことを情報共有しながらレフェリングの向上につなげていきたいと思っています。

「サッカー 1 級審判員になって」 1 級審判員 大原 謙哉 氏

2006 年(当時 18 歳)、父親の影響で審判を始め、その後多くのことを経験させていただき、2012 年 12 月に 1 級審判員になることができました。1 級 1 年目の前期は、JFL リザーブというカテゴリーで、以下のような多くの研修会や全国大会に参加させていただきました。

- ・浦和カップ (新 1 級研修)
- ・1 級審判員研修会
- ・デンソーチャレンジカップ (JFL リザーブ研修)
- ・ミカサカップ (JFL リザーブ研修)
- ・高校総体

これらの研修、大会を通じて感じていることは、「自分は日本のトップレフェリーと同じ立場にいる」ということです。もちろん、経験も実力もまだまだトップレフェリーに及びませんが、そのような人たちと同じ 1 級であることに変わりはありません。

1 月に行われた 1 級審判員研修では、全国の全ての 1 級・女子 1 級審判員が参加しました。その中にはプロフェッショナルレフェリーもいます。今まで、テレビの中に見ていた方々が目の前にいるという光景は、とても現実とは思えませんでした。それと同時に、自分はここまで来たという、達成感と緊張感も味わうことができました。

日本協会からいただく割り当てでも、JFL や J2 で経験豊富な審判員と組ませて頂くことがあり、いつも多くのことを勉強させていただいています。たくさんの観客が観戦している中で審判はプレッシャーを感じることも少なくありませんが、そのようなプレッシャーの中で自分が主審として審判をし、達成感を味わってみたいといつも思っています。



(初めての J2 4th)



(福岡での高校総体 1 回戦)

また、1 級審判員になり、心掛けていることは「目標とされる審判員であること」です。

自分が 3 級、2 級のと看、1 級審判員の方は憧れや目標でした。自分が 1 級になった今、当然 2 級、3 級の方からは、1 級審判員として目標にされることになります。関西、大阪でのレフェリングや振る舞いから、何か良い影響を与えていかなければならないと強く感じています。

2013 年度後期は、JFL 副審ということで、日本全国の会場で開催される試合を担当させていただくことになります。上には上があり、まだまだ先は長いですが、これからも多くの方と出会い、勉強し続けていきます。

常に評価され続ける環境の中でもサッカーの楽しさを忘れず、さらに上のカテゴリーを目指していきます。そして、選手第一の気持ちを持ち続け、日本サッカー発展のために、今後も活動していきます

2013/2014 競技規則の改正について

国際サッカー連盟(FIFA)から 2013 年 6 月付回状 1362 号をもって、2013/2014 年の競技規則の改正について通達されました。今回の改正では、条文の変更はありませんが、“ オフサイドの解釈” が以前より、具体的で明確なものが示されるようになりました。

オフサイドの解釈の変更に関して、公益財団法人日本サッカー協会のホームページ内で動画で確認することができます。

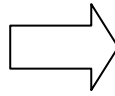
■公益財団法人日本サッカー協会ホームページ

トピックス 2013/2014 年 競技規則の改正について(第 11 条-オフサイド競技規則の解釈の変更)

<http://www.jfa.or.jp/match/topics/2013/78.html>

現在の文章

“ 相手競技者に干渉する” とは、明らかに相手競技者の視線を遮る、相手競技者の動きを妨げる、しぐさや動きで相手競技者を惑わす、または混乱させると主審が判断し、それによって相手競技者がボールをプレーするまたはプレーする可能性を妨げることを意味する。

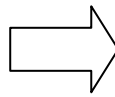


新しい文章

“ 相手競技者に干渉する” とは、明らかに相手競技者の視線を遮る、またはボールへ向う相手競技者にチャレンジすることによって、相手競技者がボールをプレーするまたはプレーする可能性を妨げることを意味する。

現在の文章

“ その位置にいることによって利益を得る” とは、既にオフサイドポジションにいて、ゴールポストやクロスバーからはね返ってきたボールをプレーすること、または既にオフサイドポジションにいて、相手競技者からはね返ってきたボールをプレーすることを意味する。



新しい文章

“ その位置にいることによって利益を得る” とは、次のようにボールをプレーすることを意味する。

(i) ゴールポストやクロスバー、または相手競技者からはね返った、またはそれらに当たって方向が変わってきたボールを、既にオフサイドポジションにいる競技者がプレーすること。

(ii) 相手競技者が意図的にセーブすることで、はね返った、方向が変わってきた、またはプレーしたボールを、既にオフサイドポジションにいる競技者がプレーすること。

相手競技者が意図的にプレーした（意図的なセーブは除く）ボールを、既にオフサイドポジションにいる競技者が受けたとしても、その位置にいることによって利益を得たとは判断しない。

今回のオフサイドの解釈変更によって、現行の日本での解釈や適用についても一部修正が求められます。
競技規則や日本サッカー協会のホームページ(上記に記載)に掲載されている動画を見て、
しっかりと理解をしておきましょう！！

なお、新オフサイドの解釈の試合での適用は、試合や大会によっては以前のオフサイドの解釈で行う場合もあります。試合開始前に必ず、試合や大会関係者に確認するようにお願いします。

編集後記

9月6日、日本代表 対 グアテマラ代表の試合を観に長居スタジアムまで足を運びました。いつもはテレビで日本代表を応援！が多いのですが、大阪に日本代表が来るという事でスタジアムで観戦。スタジアムの雰囲気・観客の声援・ボールを蹴る音など、肌でサッカーを感じ、あらためてサッカーは生で観るのが一番！と思いました。2020年に東京オリンピック・パラリンピックも決まり、ますますスポーツに対して注目が集まっていく中、この勢いに乗って、サッカー日本代表も来年のブラジルワールドカップ、頑張っ

(編集者：湯尾)

